

批判的思考態度とメディア特性の理解の関係

Relationship between Critical Thinking Disposition and Understanding of Media Characteristics

後藤 康志
Yasushi Gotoh

新潟大学教育・学生支援機構
Institute of Education and Student Affair, Niigata University

<あらまし> 本研究では批判的思考態度とメディア特性の理解の関係について検討することを目的とし、大学生及び現職教員 48 名を対象とした調査を行った。結果として、「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」という条件において、批判的思考態度が高い者は嗜好性や簡便性といったメディア特性に比べ、信頼性に重点を置く可能性が示された。また、Web には重点を置かないことが示唆された。

<キーワード> メディア・リテラシー 批判的思考 メディア特性の理解 教材開発

1. 背景

筆者は、メディア・リテラシーを「多様な情報メディアの特性を踏まえ、それらを情報の受信と発信に主体的に活用するとともに、情報を鵜呑みにすることなく批判的に捉えようとする態度及び能力」と捉え、メディアから主体的に情報を得ようとするほどメディア操作スキルが高まり、それがメディア特性の理解に影響し、メディア特性の理解がメディアに対する批判的思考に影響することを明らかにした(後藤,2006)。

多様なメディアを自由に選択できる時代においてメディアの特性を理解した上で情報を取捨選択し、解釈する能力が求められている。イギリス教育省も自らのメディア選択の特徴を説明できることがメディアに対する批判的思考と関係することを指摘しており(DCMS 2001)、自らのメディア選択をメタ認知的に捉え、目的に合致したメディアを利用しているか、省察しつつ情報を捉えることが望まれる。このような問題意識から、筆者は学習者が自らのメディア選択においてどのメディア特性を重視しているかを階層分析法(AHP: Analytic Hierarchy Process)を用いて可視化し、その可視化されたメディア特性と自らのメディア行動とを比較して省察するメディア・リテラシー育成教材の開発に取

り組んでいる(後藤,2012a)。

このような経緯を踏まえつつ、本研究を出発点として今後検討していきたいのは、

メディア・リテラシーは、一般的な批判的思考が、メディア利用という特定場面において発揮されるものと考えてよいのか

考えてよいとして、一般的な批判的思考でメディア・リテラシーのすべてを網羅し得るのか。

ということである。例えば、メディアからの情報であれ、対面で得られる情報であれ、受容の場面において得られた情報を鵜呑みにせず、多面的に捉えたり、欠けている情報は何かを考えたりしながら行動している者は、メディア利用の場面においても同様の傾向を示す、と考えるのは自然なことであろう。AHPでは最初に基準(検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性)の一对比較を求められるため、「どのメディアか」とは切り離すことができる。

筆者の研究では、メディア利用の目的を「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」に限定しメディア特性を検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性の5つ、メディアを Web、

図書、テレビ、新聞、雑誌の5つに限定し、AHPを用いてそれぞれの優先度を可視化した。「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という課題において、最も優先される特性として想定したのは信頼性であったが、実際には想定通り信頼性に重きを置く者が多い反面、嗜好性や簡便性を重視する者が一定数、存在することが見いだされた（Gotoh,2012; 後藤 2012b;2012c;2012d）。このような個人差が生じる原因として「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」状況がよく理解できなかったのではないかと、との指摘を得て、後藤（2013a）では、そうした経験が豊富と思われる現職教員と大学生の比較を行ったものの、顕著な差は見られなかった。

そこで、本研究で批判的思考態度に着目し、メディア・リテラシーの固有の場面において、批判的思考態度が高い者は、情報の信頼性を確認しようとする傾向があるか否かを検討したい。

一方、筆者自身は「一般的な批判的思考でメディア・リテラシーのすべてを網羅し得る」とは考えていない。というのは、平素より利用しているメディアほど優先順位が高くなる、という傾向があるからである（後藤, 2013b）。いかに批判的思考がメディア・リテラシーの基底をなすとしても未知のメディアに対して妥当な評価はできない。さらに、人々が意識していないある種の習慣やメディアのインフラが、メディア行動を暗黙のうちに規定しているのかも知れない。

メディア・リテラシー育成において、一般的な批判的思考と共通する場面においてメディア・リテラシーの固有場面と取り上げて学習するのは重複に過ぎず、多忙な教育現場にとって受け入れがたいものとなるだろう。高等教育の質保証において批判的思考の重要性が言われており、それぞれの学校段階で批判的思考の学習が必要と考えるが、メディア・リテラシーの育成はこの一般的な批判的思考の共通部分と固有部分を明確にして行うべきである。このような問題意識のもと、本研究では批判的思考態度とメディア特性の理解に焦点化する。

2. 目的

本研究では批判的思考態度とメディア特性の理解の関係について検討することを目的とする。

3. 方法

3.1. 対象及び調査時期

対象は大学生及び現職教員 48 名である。調査時期は 2013 年 8 月 13 日である。

原稿の冒頭には、和文と英文で題名、著者名、所属機関を入れる。

3.2. 批判的思考態度

批判的思考の構成要素は能力、態度、知識とされるが、メディア特性の理解における信頼性の重視に関係が深いと考えられるのは、批判的思考態度とも考えられる。批判的思考態度の測定には、廣岡ら（2001）の批判的思考志向性尺度や、カリフォルニア批判的思考態度尺度を日本語化した川島（1999）などがあるが、信頼性・妥当性の検討を経た平山ら（2004）の批判的思考態度尺度を利用した。この尺度は「論理的思考への自覚（13 項目）」、「探求心（10 項目）」、「客観性（7 項目）」、「証拠の重視（3 項目）」からなる 5 件法の尺度である。

3.3. メディア特性の理解

目的を「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」、基準を検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性、代替案を Web、図書、テレビ、新聞、雑誌とする階層分析法を行った（高萩・中島, 2005）目的からみた基準の対比較を行い、基準の下での代替案の対比較を行った。固有値法により対比較表からプライオリティを算出した。

批判的思考態度尺度と

3.4. 批判的思考態度とメディア特性の理解の関係の検討

批判的思考態度尺度の各項目の合計を算出し、上位 25% を態度高群、下位 25% を態度低群とした。

AHP により算出したプライオリティについて、検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性の 5 つの特性、Web、図書、テレビ、新聞、雑誌の 5 つのメディアごとに、態度高群と態度低群の比較を行った。

4. 結果

4.1. 批判的思考態度

批判的思考態度尺度値の平均は 111.39 であり、標準偏差は 15.30 であった。

上位 25% を態度高群 (批判的思考態度尺度値平均 129.75, 標準偏差 6.86), 下位 25% を態度低群 (批判的思考態度尺度値平均 92, 41, 標準偏差 3.51) とした。

4.2. メディア特性 (基準) による比較

メディア特性 (基準) による 2 群の平均値を図 1 に示す。信頼性について t 検定を行ったところ有意傾向が見られた ($t=1.939$, $df=22$, $p<.10$)。このことから、批判的思考の態度が高い者は、「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」という目的において、他の特性より信頼性に重きを置く傾向があることが示唆された。

一方、速報性、簡便性、嗜好性、検索性について t 検定を行ったところ有意な差はなかった。

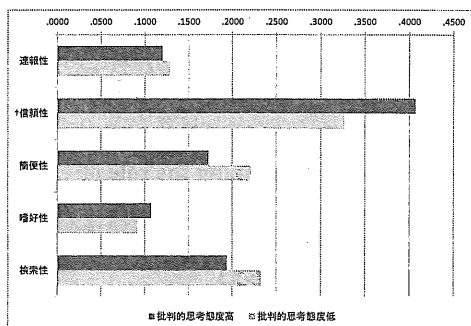


図 1 メディア特性による比較 † $p<.10$

4.3. メディア (代替案) による比較

メディア (代替案) による 2 群の平均値を図 2 に示す。Web について t 検定を行ったところ 5% 水準で有意な差が見られた ($t=2.577$, $df=22$, $p<.05$)。このことから、批判的思考の態度が高い者は、「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」という目的において、Web を優先しない傾向があることが示唆された。

なお、図書、テレビ、雑誌、新聞について t 検定を行ったところ有意な差はなかった。

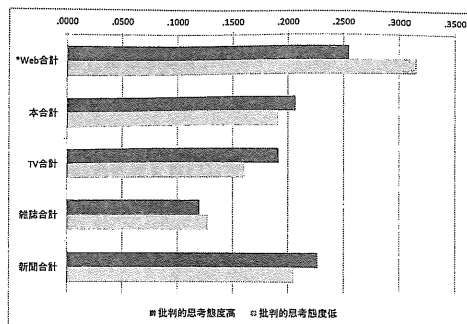


図 2 メディアによる比較 * $p<.05$

5. 考察

本研究は限られたデータによる限定的な検討とならざるを得ないが、批判的思考態度が高い者は、「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」という条件において、信頼性に重点を置く可能性が示された。

また、批判的思考態度が高い者は、「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」という条件において Web に重点を置かないことが示唆された。

筆者は本研究をメディア・リテラシーと一般的な批判的思考との関係を検討の出発点と考えている。今回はわずかにその傾向が示唆されたに過ぎないが、批判的思考態度とメディアの信頼性を重視しようとする傾向とは何らかの関係があることが示唆された。

6. 課題

最後に、今後の課題について 2 点、述べる。

第一に、批判的思考態度とメディア特性の理解との関係についてである。今回、極めて限られたデータによる検証であったこと、大学生と現職教員という限られたサンプルのみが対象であり、より幅広い層から、多くのデータを収集し、検討していきたい。

第二に、批判的思考技能及び批判的思考知識と、メディア特性の理解との関係の検討である。特に批判的思考技能の測定について、既にいくつかの尺度が既に開発され、利用可能である。今後、サンプルを増やすとともに、態度だけでなく技能について測定し、検討を進めていきたい。

7. 謝辞

本研究の一部は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）「メタ認知とパフォーマンス評価を組み入れた高次批判的思考力育成モジュール教材の開発」課題番号 24501179：研究代表者後藤康志）による助成により行われています。感謝申し上げます。

引用参考文献

- 白南権（1992）学習メディアに対する先有知覚の機能に関する研究 日本教育工学雑誌 16(2),107-117
- Clark, R. E. (1983) Reconsidering research on learning from media. *Review of Educational Research*. 53,445-459
- Ennis, R.(1987) A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities .Teaching thinking skills: theory and practice. Edited by Joan Boykoff Baron, Robert J. Sternberg. Freeman.
- 後藤康志(2006) メディア・リテラシーの発達と構造に関する研究. 新潟大学提出博士学位論文
- 後藤康志(2012a) メディア認知の意識化を組み入れた批判的思考力育成プログラムの開発.文部科学省科学研究費（基盤研究（C））成果報告書
- 後藤康志（2012b）学習者のメディア特性の理解の類型化の試み. 日本教育メディア学会大会講演論文集,17-18
- 後藤康志（2012c）メディア日記法によるメディア活動の記録. 日本教育メディア学会大会講演論文集,149-152
- 後藤康志(2012d) AHP を用いたメディア特性の理解の可視化. 日本教育工学会研究報告集,JSET12(3): 31 - 36
- 後藤康志(2012e)学習者によるメディア特性の理解の類型化.日本教育工学会研究報告集, Vol.JSET12, No.4, pp.151 - 156
- 後藤康志(2013a) メディア特性の理解の現職教員と大学生の比較". 日本教育工学会研究報告集, Vol.JSET13, No.1, pp.241 - 246
- 後藤康志(2012b)メディア接触がメディアの認知に及ぼす影響.日本教育メディア学会第20回大会講演論文集（印刷中）
- 後藤康志・生田孝至（1999）受信・発信メディアに対する児童の先有知覚に関する研究. 日本教育工学雑誌, 23 : 85 - 88
- 平山るみ・楠見孝（2004）批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響. 証拠評価と結論生成課題を用いての検討, 教育心理学研究,52,186-198
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛（2000）クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究, 三重大学教育学部紀要, 51, 161-173
- 今井真悟（1993）児童のメディアに対する先有知覚と教師の指導法との関係 新潟大学修士論文
- 川島範章（1999）柔軟な思考態度と表現態度を促す授業の実践.高校国語科における心の教育.兵庫教育大学大学院修士論文
- Krendle, K. A. (1986) Media influence on learning : Examining the role of preconceptions. *Educational Communication and Technology Journal* 34,223-234
- 佐賀啓男（1988）多メディア利用事態における学習者のメディア知覚と教師の役割 放送教育開発センター研究報告 9, 95 - 115
- 佐賀啓男（1993）中大学生のメディアに対する先有知覚の性格と学習 視聴覚教育研究 23, 55-67